

道草展

未知とともに歩む

「植物の扱いは社会そのもののあり方を物語る」というワインバーガーの言葉に、私たちは本展覧会を通して繰り返し立ち返ることになるでしょう。そして、彼が「生が姿を規律越しに見せる場所」と呼んだ、自然における周縁部に目を向けることから、人為的に構築された秩序を揺さぶり、自然の中の多様性と共存の原理をもってあらゆるヒエラルキーを克服する実践について考えてみる

※作品、展示台、壁に触れないください
※お手荷物が作品、展示台、壁に触れないようご注意ください
※展示室内での筆記用具は鉛筆のみご利用いただけます
※つぎの範囲内で写真撮影が可能です
・ 動画撮影は不可
・ 作品単体ではなく展示風景としての撮影であること
・ フラッシュ、三脚を利用しないこと
・ 他の鑑賞者を撮影しないこと
・ 撮影した写真は私的な利用に限ること
※撮影した写真をSNSにアップする際には、作品タイトル、アーティスト名、並びに#道草展をつけて投稿してください

ロイス・ワインバーガー

1947年オーストリア・チロル州シュタムス生まれ。オーストリアのウィーンを拠点に活動し、2020年に同地で永眠。

ワインバーガーは、いわゆる人里植物と呼ばれる、人為による攪乱が激しい環境に生きる植物の存在を一貫してその創作の源としました。自然と密接にかかわる自らの創作活動を詩的かつ政治的なアクションと捉え、フィールドワークを重視した創作過程から自然とともに作品を作り上げた先駆的存在といえるでしょう。

1994年に旧東ベルリン郊外で撮影された一連の白黒の写真作品には、戦災地から集合住宅地へと移り変わる風景のなかに、人間によって支配されないもう一つの成長と衰退が垣間見えます。ワインバーガーは、排外主義的な一面をもつ地区としても知られていた土地に、自らの庭の植物を移植するという象徴的なアクションを行いました。

624枚のスライドから成る《**ガーデン・アーカイヴ**》は、ウィーン郊外の土地の植生を11年間撮り続けた記録写真の集積です。分類や名付けを目的としないこれらの記録から、瘦せた土地に息づく植物相の豊かさが作品の構想に関与していたことがうかがえます。「領域」と呼ばれたこの土地から、前述のベルリン郊外やワタリウム美術館の屋上庭園など世界各地で行われた作品の構成要素として、多くの植物の種子が「離散」していきました。また、連作「**フィールドワーク**」はアーティストの思考のプロセスを巨大な地図に書き記した作品です。一方には場所 (Ort) や歩く (herumlaufen) など歩行中に連想された言葉が連なり、また、他方には土着の信仰に関する言葉が配されています。

「植物の扱いは社会そのもののあり方を物語る」というワインバーガーの言葉に、私たちは本展覧会を通して繰り返し立ち返ることになるでしょう。そして、彼が「生が姿を規律越しに見せる場所」と呼んだ、自然における周縁部に目を向けることから、人為的に構築された秩序を揺さぶり、自然の中の多様性と共存の原理をもってあらゆるヒエラルキーを克服する実践について考えてみる

場所／
生が
姿を／
規律越しに
見せる場所
絶滅は不可能
その不可能が／
繰り返し
絶滅の逆から／
不毛の逆の
もたらしうる結果から／
思い切った未来へ
咲く場所
《詩》1990（翻訳：縄田雄二）

露口啓二

1950年徳島県生まれ。現在北海道を拠点に活動。「『写真家』は『出来事』に遅れて到着する」と考える露口は、出来事の結果を写しとるのではなく、文献や資料をたよりに一つの場所を繰り返し訪れ、環境のなかに身を置くことで、そこに起こり続ける変化を捉えてきました。

2011年に制作を開始した「**自然史**」は、それぞれの歴史や場所性をもった風景を繰り返し訪れて撮影し、異なる時点での風景を並置して見せる連作です。アイヌ文化の拠点であった漁川や沙流川の流域、古来より人間と自然の物理的・精神的交流の謂れのある吉野川、圧倒的な自然に繰り返し対峙してきた東北太平洋岸、そして福島の帰還困難地区とその境界線―これらの場所を捉えた写真は、「徐々にしかし着実に浸透してくる『自然』とよばれるもの」に覆われた風景の間に、人為を超えた空間が存在することを示唆しています。一方「**地名**」は、かつてアイヌ語で呼ばれ、幕末期のカタカナ表記、その後の漢字表記を経るなかでその場所に発生した意味のねじれや切断を念頭に置きながら、イメージによって場所性や固有性に介入することを試みた作品です。「名前のなかでは、個々のものが世界と関連しつつ、私たちに帰属する」という言葉を残したパウル・ツェラーンの

詩において、場所 (Ort) が言葉 (Wort) に含まれるとき、その地名はしばしば特定の場所とは異なる「どこにもない場所」を志向するものであったといえます。

出来事と場所の間に近さと遠さを与えながら、「風景から剥がしとった片々」として撮影された露口の写真もまた、固有の出来事や場所性から切り離され、捉えることのできない「どこにもない場所」として見るることができるでしょう。そして、かつての地形や共同体から強制的に切り離された言葉に含まれる場所の意味の連なりが現れるとき、見る者のなかに「どこにもない場所」が改めて想起されるのです。

ロー・ヨクムイ

1982年香港生まれ。同地を拠点に活動。ロー・ヨクムイは、自身の故郷であり、さまざまな人種や文化が交差する場所・香港の風景や地理に目を向け、その歴史と急速な社会変化を映し出す詩情豊かな作品を制作しています。

《**植物**》は、人間と植物の複雑で情緒豊かなつながりを香港の地政学的アイデンティティと重ねた映像作品です。3部構成の本作は、英国統治時代の香港植物園で撮影されたファウンドフッテージと中国古典演劇の一つである昆劇¹の役者が男性から女性へと姿を変える過程が伏線となり、自然のなかに人間の情感を描いた戯曲『牡丹亭』を軸としたクライマックスへと至ります。憂いや喜び、恋慕といった感情の動きが独特な身振りと言、歌によって表現される山場では、戯曲や文学作品からの引用とロー自身の言葉がモニター・ジュされ、視聴覚と言語の間の揺らぎを生み出しています。夢の相手に恋わずらいした娘が命を落とし、梅の花となって再び恋人と出会って蘇生し最後には結ばれるという『牡丹亭』のあらすじの「不自然さ」には、人間と人間以外の性愛や、再生産とは異なる死と生の在り方が示唆されます。さらに、冒頭に映る香港の象徴花のパウヒニア・ブラケアナ²が雑種不稔性の植物であることなど、本作は異性愛規範性、ひいては人間が「自然」と定めてきたものによって構築される抑圧／被抑圧という関係からの解放を思わせませす。文化大革命以後衰退したという女形の身振りからも、相互浸透的で不可分な自然の有様と人間の心の機微の交わりを感じるができるでしょう。さもないと誰もかも目がつぶれてしまいます³
ローの作品を通して常に感じられる揺らぎの感覚は、香港に漂う矛盾や戸惑いの不穏さからくる眩暈なのでしょうか。それとも、既存の二項対立を解体し、支配的なシステムやあらゆる抑圧から抜

け出すしなやかさの表れなのでしょうか。

- 明の時代に発祥したとされる中国の古典演劇の一つ。『牡丹亭』はその代表作
- パウヒニア・ブラケアナは香港原産の植物。別名「ホンコンオーキッドツリー」と呼ばれ、香港特別行政区の紋章にも使われている
- エミリー・ディキンソン『真実をそっくり語りなさい、しかし斜めに語りなさい―』岩波文庫、亀井俊介編

ミックスライス（チョ・ジウン、キム・ジョンウォン、コ・ギョル）

2002年結成。韓国のソウルを拠点に活動。ミックスライスは、移住によって生まれる変化やその痕跡、想起される記憶に目を向け、移り変わる過渡におかれた個やコミュニティと共同しながら、写真や映像、テキスト、アニメーションなどのメディアを用いた作品を制作してきました。《**つたのクロニクル**》は、ミックスライスが韓国各地で土地開発によって移植された樹木の軌跡をたどって制作した作品です。都市計画のために買い上げられ移植された樹、ダム建設により育った場所を立ち退いた樹、済州島で人々の心の拠り所になってきた樹―人間の生活圏にあり、人間社会の都合に翻弄される樹木の姿には、各地で行われる開発に向けられたアーティストの真摯なまなざしが映し出されています。植物の根や幹枝だけでなく、人間を取り巻く自然・社会環境までもを分断する持続性を省みない開発がもたらした「昨日もなく明日もない、いつも今日だけがある世界」で、私たちはどのように生きてゆくことができるのでしょうか。

植物に関するミックスライスの一連の作品は、あるケヤキの話が原点になっています。樹齢千年になるケヤキが高級住宅地の植栽として高額で購入され、移植後数年で枯れて別の樹と植え替えられたというこの話は、樹木にまつわる時間と価値についての探求へと彼らを駆り立てました。済州島の老人たちが語る樹々との精神的なつながりやダムで沈んでしまう共同体との対話を通じて、植物を軸とした過去／現在／未来をつなぐナラティブの網を張り巡らせること。放棄された場所に生きたものの痕跡として、植物の輪郭を写し取ること。移植された樹が土地に根づく時間に人間が歩みをあわせ、時をかけて自然や自然をとりまく共同体との新たな関係性を構築することこそ、人間を環境につなぎとめる方法なのです。

ウリエル・オルロー

1973年スイスのチューリッヒ生まれ。ロンドンとリスボンを拠点に活動。オルローは、作品制作の過程で綿密な資料調査や現地取材を行い、歴史や表象が取りこぼしてきたものに目を向け、記憶を喚起する空間的な作品を制作してきました。

2015年から18年にかけて制作された「**植物の劇場**」は、南アフリカ共和国と植民地宗主国との間にあった占領の歴史や今日に至る貿易交流、知見の交換を、植物の視点を通して読み解くプロジェクトです。《**グレイ、グリーン、ゴールド**》では、ロベン島刑務所の菜園と黄金色の極楽鳥花の栽培というネルソン・マンデラに関する象徴的なエピソードから、南アフリカの歴史に対する詩的なアプローチを試んでいます。また、展示室中央の映像3部作は、伝統療法に用いられる薬草を議論の中心に据え、人間界と自然界、伝統と現代、先住民族の権利と知的財産権など対極にあるものをつなぎあわせることで、その意味を問い直す作品群です。なかでも《**ムティ(薬)**》は、南アフリカの都市や郊外で現在でも実践されている薬草療法を取材し制作されました。物語を構築しさまざまな主体の言葉に耳を傾けることを促す他の2作品とは異なる視点から、人々の日常、そして政治構造や歴史、知見のシステムという複数のレベルで人間と薬草のつながりを示唆します。

別室に展示されている近作《**アルテミシアから学ぶ**》は、コンゴ共和国ルンバシで抗マラリア薬として栽培されているアルテミシア（ヨモギ属の植物）の歴史や栽培について調査し制作した作品です。この薬草は歴史上戦況を変え、多くの人命を救ってきましたが、世界保健機構はその効能を認めていません。自らもアルテミシアのお茶を飲み現地取材をするなかで、オルローは現地の女性たちとの継続的な協力関係を構築し、アーティストがその歴史や土地に介入することの新たな可能性を見出しています。

人間、そして人間以外の種のなかで、誰が語り、私たちは誰の言葉に耳を傾けるのでしょうか。植民地社会と資本主義社会において切り縮められてしまった人間と自然との諸関係を、再構築することは可能なのでしょうか。

上村洋一

1982年千葉県生まれ。同地を拠点に活動。上村は、視覚や聴覚から風景を知覚する方法を探り、フィールドレコーディングによって世界各地の環境にアプローチし、そこで得た素材やコンセプト

をもとにインスタレーション、絵画、サウンドパフォーマンス、音響作品などを制作してきました。2019年から開始した知床半島でのフィールドワークでは、流氷をとりまく諸現象から人間と自然という境界なきエコロジーを探求しています。

《**息吹のなかで**》は、流氷の海でフィールドレコーディングを行った際に、闇のなかで人間世界の外側を感じたという上村自身の経験から着想を得た作品です。オホーツク海の流氷が生み出すさまざまな環境音や、海中生物の鳴き声、そして、いまは聴くことができない「流氷鳴り」を人間の呼吸や口笛で再現した音などが混成され、一つのサウンドスケープとなって見る者を没入的な体験へと招き入れます。

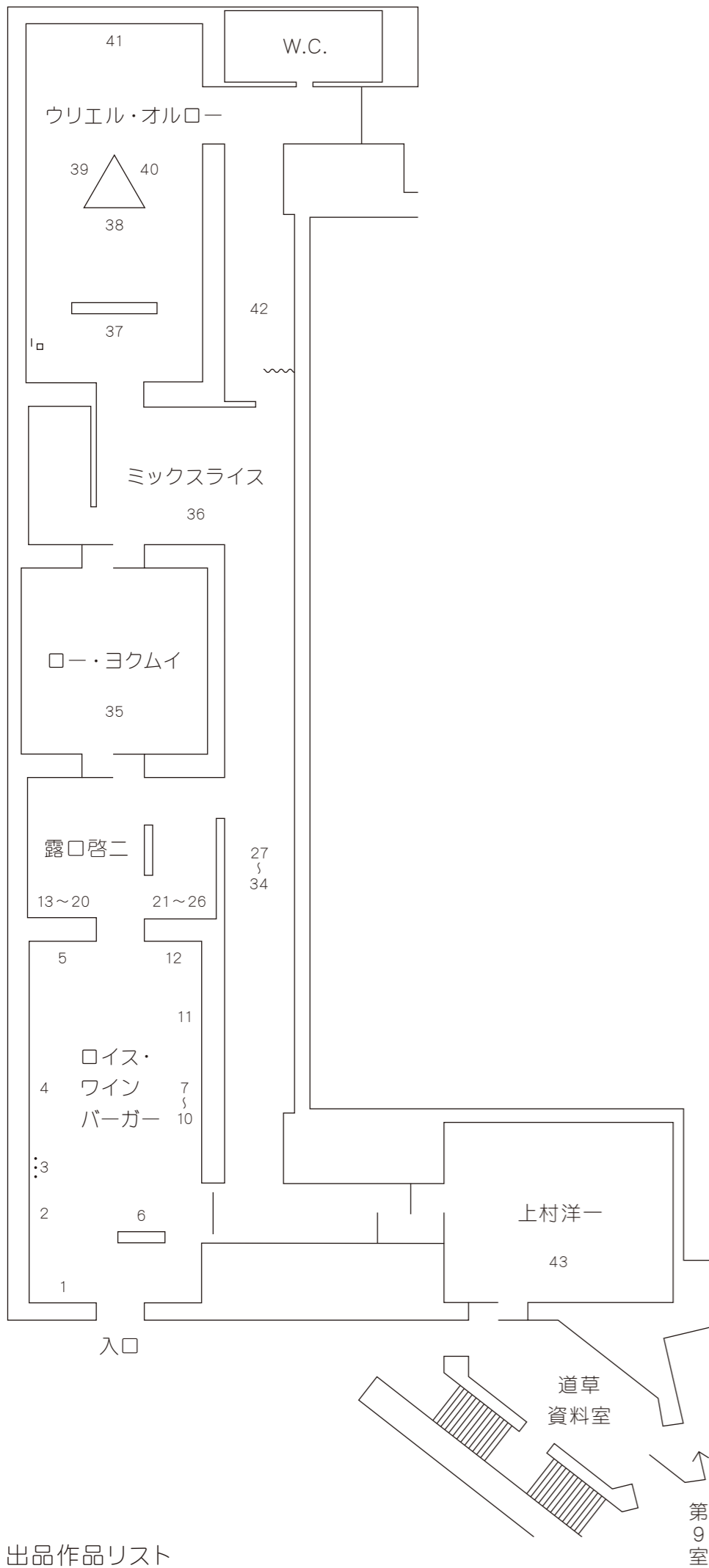
「流氷鳴り」とは、海のなかの空気が、潮汐によって氷塊の間から空気が押し出されて人間の呼吸のような音を出す現象です。流氷の減少によって近年ではほとんど聴かれなくなり、知床半島でもあまり知られていません。現地の人々による流氷の回想からその不在の音を捉えようと試みるとき、私たちの息吹と、流氷の隙間から大気へ吹き出す空気があたかも連動し、呼吸のたびに体内へと取り込まれ吐き出される「空気」の存在が生々しく感じられます。

その感覚とは、人間活動に伴う代謝が地球温暖化による流氷の融解を引き起こしているという、後ろ暗い「不安」なのでしょうか。それとも、呼吸という人間にとって不可欠な現象でさえ、他の生物が生成する酸素によって可能になるという私たちの内なる非人間性への気づきなのでしょうか。これらの問いの答えは、人間と自然の間の「不穏な」境界にあります。そして、たとえばこの空気のように、当たり前に触れていたものとの間に生まれるアンビバレントなつながりにこそ、人間と自然との来るべきエコロジーが見出されるのかもしれない。

アンケートご協力をお願い

水戸芸術館現代美術ギャラリーのアンケートにご協力ください。下記のQRコードからフォームにアクセスし、展覧会の感想やご意見をお寄せいただければ幸いです。





出品作品リスト

ロイス・ワインバーガー

- 屋外展示 (広場)
 ワイルド・エンクロージャー
 2020
 自然発生する植生
- 無題
2007
写真
 - フィールドワーク
2014
油性サインペン、樹脂加工した綿布
 - 杖
2004
6本の木製の杖
 - フィールドワーク
2004
油性サインペン、樹脂加工した綿布
 - 詩
1990 / 2020
 - 《ワイルド・エンクロージャー》のための
ドローイング
2020
紙に鉛筆
 - ベルリン、マルツァーン
1994
写真
 - ベルリン、マルツァーン
1994
写真
 - ベルリン、マルツァーン
1994
写真
 - 領域 II の記録
2004-2009
写真
 - ガーデン・アーカイヴ
1988-1999
624枚のスライド (スライドフィルムからのデジタル複写)

All works courtesy of Studio Lois Weinberger and Krinzinger Gallery, Vienna.

露口啓二

- 「自然史」より
 13. 漁川・本流
2012
発色現像方式印画
14. 漁川・本流シラッチセ
2012
発色現像方式印画
15. 沙流川・荷負
2011
発色現像方式印画
16. 沙流川・二風谷
2015
発色現像方式印画
17. 東北太平洋岸・南相馬市・井田川浦
2015
発色現像方式印画
18. 東北太平洋岸・南相馬市・井田川浦
2015
発色現像方式印画
19. 吉野川・粟島
2014
発色現像方式印画
20. 吉野川・忌部山
2014
発色現像方式印画
21. 福島原子力発電所事故被災地
帰還困難区域・境界線
2014
発色現像方式印画
22. 福島原子力発電所事故被災地・境界線
2014
発色現像方式印画
23. 福島原子力発電所事故被災地 帰還困難区域
2016
発色現像方式印画
24. 福島原子力発電所事故被災地 帰還困難区域
2016
発色現像方式印画
25. 福島原子力発電所事故被災地 避難指示解除
準備区域
2014
発色現像方式印画

26. 福島原子力発電所事故被災地 避難指示解除
準備区域
2014
発色現像方式印画
- 「地名」より
 27. 札比内
2001年4月 / 2002年9月
発色現像方式印画
28. 長知内
2015年5月 / 2015年8月
発色現像方式印画
29. 濃昼
2001年6月 / 2001年8月
発色現像方式印画
30. 発足
2001年5月 / 2001年6月
発色現像方式印画
31. 宿徳内
2016年5月 / 2016年11月
発色現像方式印画
相模原市蔵
32. 信香
2001年7月 / 2001年9月
発色現像方式印画
相模原市蔵
33. 大誉地
2002年5月 / 2002年10月
発色現像方式印画
相模原市蔵
34. 俣落
2003年5月 / 2002年5月
発色現像方式印画
相模原市蔵
- ロー・ヨクムイ
 35. 殖物
2019
3チャンネルビデオ、6チャンネルサウンド
22分20秒
- ミックスライス
 36. つたのクロニクル
2016
2チャンネルビデオ、サウンド、写真 (9点組)、壁紙
8分46秒

ウリエル・オルロー

- 「植物の劇場」より
 37. グレイ・グリーン・ゴールド
2015-2017
セメント製の台座、ルーペ、種、81枚のスライド、スライドプロジェクター、写真
38. ムティ (薬)
2016-2018
シングルチャンネルビデオ、サウンド
17分
39. マファヴケ対王冠
2016
シングルチャンネルビデオ、サウンド
18分45秒
40. マファヴケの審議
2017
シングルチャンネルビデオ、サウンド
28分
41. ムティ (薬)
2017
昇華転写プリント
3点 (7点組)
42. アルテミシアから学ぶ
2019-2020
3チャンネルビデオ、サウンド
14分18秒

上村洋一

43. 息吹のなかで
2020
6.1チャンネルサウンド、蛍光塗料、紫外線ライト、植物育成LEDライト、砂
約15分

道草資料室

(協力: 茨城大学地球・地域環境共創機構 [GLEC])

同時開催 (第9室)

クリテリオム 97 肥後亮祐